城郭御殿の至宝　名古屋城本丸御殿

名古屋工業大学　名誉教授　麓　和善

１　名古屋城築城と慶長創建期の本丸御殿

名古屋城は、豊臣方との決戦(大坂の陣)に備えて、徳川政権の前衛として、徳川家康によって造営された。まず慶長 15 年(1610)から 16 年にかけて、諸国から技術職人が集まり、清洲から御家人住宅や諸社寺を移し始める。「清洲越」といわれる大移動である。

石垣や堀の土木工事は、慶長 15 年に、西国・四国・九州の外様大名総数 20 名による天下普請で行なわれた。豊臣家に恩顧のある大名の財力を消費させる目的があった。本丸・二ノ丸・深井丸・西ノ丸の石垣が同年 9 月までには完成した。

一方、建築工事は、慶長 16 年から幕府の直轄工事として行われ、まず、諸門・櫓・長屋等の工事にとりかかり、天守はやや遅れて翌 17 年 6 月頃に着工し、同年末には城郭としての構成ができあがった。

本丸御殿は天守完成後に着工、大坂冬の陣直後の慶長 20 年 2 月に藩主義直が移り、4 月 12 日にはここで春姫と義直との婚儀がとり行われた。

この慶長創建期の本丸御殿は、敷地の南東隅から西北隅にかけて、御遠侍・御広間・御対面所・御料理之間など行政機能を持つ儀礼的・公的空間の「表」から、御書院・御台所など藩主の日常の場である「中奥」を経て、御殿・小台所・御局の部屋など正・側室の住む「奥」へと、多数の建物が雁行状に続いていた。

２　将軍上洛のための御成書院(上洛殿)造営

元和 6 年(1620)に義直が二ノ丸御殿に移り、尾張藩の政庁となると、本丸御殿は、将軍が京都に上洛する際の宿泊施設となった。そして、寛永 11 年（1634）の三代将軍家光の上洛をひかえ、中奥・奥部分を撤去し、対面所の西から北に上洛殿・黒木書院・湯殿書院等を新築する改造工事が行われた。

その後、享保 13 年(1728)に、屋根を柿葺から桟瓦葺に変更するとともに、屋根側面の意匠を木連格子から漆喰塗り込めに変更した以外は、ほとんど寛永再営期の状態のまま明治維新を迎えた。

３　明治維新後の本丸御殿

明治 4 年(1871)廃藩置県後は、陸軍省の所管となり、明治 20 年まで本丸御殿は名古屋鎮台本部として使用された。

その後、明治 26 年に本丸が「名古屋離宮」となり、本丸御殿は 50 回以上におよぶ天皇・皇太子の行幸啓の行在所となった。

昭和 4 年に「国宝保存法」が制定されると、翌 5 年 12 月に名古屋市に下賜されるとともに、大天守・小天守・本丸御殿・櫓 4 棟・門 6 棟が、城郭建築としてははじめて国宝に指定された。

そして、この頃から記録保存のため、本丸御殿を中心に数百枚以上のガラス乾板写真が撮影され、さらに昭和 7 年から 12 年まで、5 ヵ年計画で実測調査が行われ、昭和 27 年に実測図 279 枚(本丸御殿 109 枚)が完成した。

ところが、同年 5 月 14 日の空襲で焼夷弾を受け、大天守・小天守・本丸御殿をはじめ大半が灰燼に帰してしまった。

現在の大天守・小天守は、昭和 34 年に外観復原されたが、これもひとえに上記実測図の賜である。

４　本丸御殿にみる慶長・寛永期の室内意匠

本丸御殿は、ほぼ東半の遠侍(玄関)・表書院・対面所・下御膳所(料理之間)が慶長期の創建、西半の梅之間・御成書院(上洛殿)・上御膳所・黒木書院・湯殿書院・孔雀之間・上御台所が寛永期の増築で、その間 20 年であるが、時代差と部屋の格式によって、それぞれの室内意匠は異なっている。

まず慶長期から見ていくと、遠侍(玄関)は、表向きの取次ぎや警備の武士の詰所で、南東隅に車寄があり、最も格の高い一之間の北面には厚い地板を敷いた間口 2 間の「押板」(床の間の原形)と間口 1 間の違棚がある。内法長押から下は、竹林に虎や雌虎と考えられていた豹が群れる障壁画で飾られている。

表書院は、公式行事や接客の機能を持つ武家の正殿で、北西隅に最も格の高い上段之間がある。上段之間はその名のとおり、床が一段高くなっており、その北面には間口 2 間の「押板」と「清楼棚」が並び、西面には押板と矩折に腰高障子と花狭間欄間が建てこまれた「付書院」、東面には「帳台構」が設けられている。これらのしつらえを総称して「座敷飾」という。障壁画は、内法長押より下にのみ描かれ、老松および老梅を中心とした花鳥図である。

対面所は、内臣との対面の場で、やはり北西隅に上段の間があり、押板・清楼棚・付書院・帳台構の座敷飾を備えている。障壁画は、内法長押より下にのみ描かれ、名所絵・祭礼図・遊楽図を組み合わせた風俗図である。

以上、いずれの建物も、南東隅の部屋から北西隅の部屋へと時計回りに部屋の格を高くし、最も格の高い北西隅の部屋では、床や天井の高さを高くし、「押板」・棚・付書院・帳台構などの座敷飾が設けられている。加えて、南東の遠侍から北西の対面所へと、建物の格が段階的に高くなるにしたがって、建築意匠も徐々に豪華になり、さらに障壁画の題材が、虎などの走獣から、花鳥を経て、風俗図の人物へと、狩野派の規格による上位の題材に変化していく。

一方、寛永期の御成書院(上洛殿)は、将軍御成の

中核施設で、座敷は北西隅に最も格の高い上段之間があり、押板・清楼棚・帳台構の座敷飾を備え、壁面には欄間彫刻を除いて内法長押上小壁にいたるまで中国の理想の皇帝を現した「帝鑑図」の障壁画で飾られている。

以上、寛永期においても、部屋に格差をつけ、しかも御成書院の壁面と格天井に障壁画・天井画を描き、さらに豪華な欄間彫刻や飾金具で装飾するなど、慶長期より格段に豪華な意匠となっている。

5　本丸御殿の復元

名古屋城本丸御殿は、二条城二之丸御殿と並び、徳川幕府の最高の技術で造営された御殿建築の傑作である。しかも建築様式上は、二条城二之丸御殿が寛永期の意匠であるのに対して、名古屋城本丸御殿は慶長期と寛永期の両方の意匠を備えており、建築史的・美術史的価値はむしろ二条城二之丸御殿を凌駕しているとさえいえる。城郭建築における国宝第一号というのも、首肯できよう。不幸にして戦災焼失したが、障壁画・天井画 1049 面が残り、加えて昭和初期には部屋全体から飾金具のような細部にいたるまで、膨大な量の写真が撮影され、正確な実測図も作成された。このような計画的な記録保存はほかに例がなく、全国的に見られる城郭建築の復原の中でも、最も忠実な復原が可能である。

平成 20 年から平成 30 年にかけて復原工事が進められ、公開されている。近世武家文化の精華ともいうべき建築・障壁画・飾金具等を実際に体感することができるようになった。

名古屋城本丸御殿　（復元）　上：遠侍　下：表書院

名古屋城本丸御殿　（復元）　上：対面所　中・下：御成書院

（写真はすべて筆写撮影）